「加速器」Vol. 4, No. 3, 2007（236–241）

会議報告

第4回加速器学会年会・第32回リニアック技術研究会の開催報告

加瀬　昌之*

Report on 4th Annual Meeting of the Particle Accelerator Society of Japan and 32nd Linear Accelerator Meeting in Japan

Masayuki KASE*

8月1日から3日の3日間，第4回日本加速器学会・第32回リニアック技術研究会が理化学研究所共催により開催されました．会場は，理化学研究所の近くの和光市民文化センター（サンアゼリア）を使用しました．和光市で加速器に関する大きな会議が開催されるのは，1999年の第12回加速器科学研究発表会以来8年ぶりとなります．8年前には理化学研究所和光でスタートしたばかりのRIビームファクトリーが昨年度末に完成し，その直後の開催となりました．

開催時期については，大学の先生方から7月下旬から8月上旬の期間との強い希望がだされ，この時期となりました．当初，東京近郊の開催であるので猛暑が懸念されました．結果は長い梅雨期終了直後と，記録的猛暑期間の始まる直前のわずかな間隙であり，後にして考えるに，台風5号の影響で多少蒸し暑かったものの，まずまずの気候に恵まれたということなりました．年会の開催時期については，特に取り決めはないようですが，ここ4回の年会ともこの時期の開催でありこれが今後も定着しそうな様子です．

発表申し込みと参加登録を通常より一月遅らせて5月上旬よりスタートさせました．期間が短くなりましたが，前半は登録数が非常にまばらで，予想通り登録は最後の数日に集中しました．当初参加が少ないのではと心配しましたが，最終的に450人を越える参加者と，口頭発表申し込み71件，ポスター発表225件となり，結局前回並の数字に落ち着きました．何の作為的な事をせずに適当な数に自然とまとまるのは不思議な感じがします．

会場は理想的に言えば400人程度収容のホールが2箇所ほしいところですが，今回の会場は，大ホールが1200人収用で大きすぎ，小ホールが300人でやや小さめでした．大ホールがガラガラで小ホールが満杯のセッションもありプログラムを組む難しさを感じました．

写真1　受付の様子

写真2　開会の挨拶の様子

* 第4回日本加速器学会・第32回リニアック技術研究会実行委員長　理研仁科センター
（E-mail: mkase@rikenjp）

プログラムは，前回に倣いポスターセッションを3日3回に分けそれぞれ1時間半ずつで一回の件数は最高80件と定めました．口頭発表は，午前中を中心に一日目にプレナリーとあとパラレル3日間に分けました．若干時間に余裕があったため初日のスタートを9時45分としました．会場の予約の都合で前日の設営準備ができなかったのでこれは助かりました．昼休みも会場周辺にレストランが少ないため長めにとりました．ただ口頭発表のセッションは，時間が延長になり昼休みがかなり圧迫される結果となりました．パワーポイントによる講演は登壇後の準備に時間がとられるため，準備時間をあらかじめ考慮しておく必要があるかと思われます．

今回の会場は，おあつらえむきの展示室を確保できなかったため，ポスター発表会場の確保に苦労しました．大ホールの1，2Fのホワイエと小ホールのホワイエを使い，ポスター発表，企業展示，受付，コーヒーサービスのそれぞれのスペースを確保しなければならず，そのレイアウトは困難を極めました．企業展示は多くの参加者が自然に行き来する場所を選択しなければならず，結局ポスター発表会場が「うなぎの寝床」のような細長い大ホール2Fホワイエを選択するしかありませんでした．ボードを3列で行ったところ，かなりの人の密度（議論？）による熱気のため熱地獄となってしまいました．2Fの空調を最大にしても1Fがより冷え過ぎてしまうだけで改善は見られませんでした．2日目からは配置を変えていくぶん密度の軽減を計りましたが，少しの改善はあったものの，根本的解決にはなりませんでした．熱中症の人が出なくて幸いでした．最終日のポスターセッションは，プログラムの最後にスケジュールされたため参加者が少なくなるのではないかと心配する向きもありましたが，実際，制限時間いっぱいまで大勢の人でポスター会場はにぎわっていました．

今回のプログラムに，これまでの年会には見慣れない「リニアック技術研究会総会」なるものがスケジュールされました．これは以下の経緯によるものです．昨年12月に行われた組織委員会で年会の名称についてこれまでの併記について見直そうとの案が出されました．この名称の併記については学会発足時に議論の結果決定されたことであり，それ以来年会と技術研究会の併記でこれまで4年間行ってきた経緯があります．しかし，最近若い人の間でこの経緯を充分ご存じでない方々から奇異に感じられるとの意見がだされ，また学会年会と技術研究会が同格で開催されることが体裁としておかしいとの意見と，既に実情は2つの会は充分融合して行ってきているので併記の必要はないとの意見もありました．参考までに第一表にこれまで20年間の歴史をまとめました．

写真3　ポスター会場の様子

写真4　学会賞受賞の様子

この件に関して本年会期前にアンケートをとることと，その結果をふまえ年会会期中にリニアック技術研究会の立場からこの議論すべく「リニアック技術研究会総会」なるものを企画しました．ところがもともとリニアック技術研究会には会員はなく世話人もはっきりしない状態でどなたに向けて声をかけたらよいかわからない状態でした．アンケートは，前年度の年会参加者を中心に，学会員，今回の年会参加予定者（その時点で参加登録している人）に向けてアンケートをメールにより発信しました．結果は第二表に示すように有効回答の93％の方が名称について変更を必要と考えているとの結果がでました．

年会2日目の昼休みの組織委員会に続き，午後に予定された「リニアック技術研究会総会」が行われ，30名ほどの人が出席され活発な意見が出されました．名称については，変更について特段異議はありませんでしたが，加速器学会年会のありかたに多少の変

第1表　この20年間の歴史（1988年から2007年）

第M回リニアック技術研究会（毎年開催）

M	年月	開催機関	代表世話人
13	88/9	電子技術総合研究所	冨増多喜夫
14	89/9	大阪大学産業科学研究所・京都大学原子炉実験所・京都大学化学研究所・大阪府立放射線中央研究所	津守　邦彦
15	90/9	北海道大学工学部	山崎　初男
16	91/9	日本大学・東京工業大学・三菱電機㈱	鳥塚　賀治
17	92/9	東北大学原子核理学研究施設	菅原　真澄
18	93/7	高エネルギー物理学研究所	佐藤　勇
19	94/7	東京大学原子力工学研究施設・日本原子力研究所・動力炉・核燃料開発事業団	鈴木　康夫
20	95/9	自由電子レーザー研究所・京都大学化学研究所・大阪大学産業科学研究所・京都大学原子炉実験所・大阪府立大学先端化学研究所	冨増多喜夫
21	96/9	日本大学原子力研究所	鳥塚　賀治
22	97/9	東北大学原子核理学研究施設	小山田正幸
23	98/9	電子技術総合研究所	三角　智久
24	99/7	北海道大学工学研究科	榎戸　武揚
25	00/7	高輝度光科学研究センター	花木　博文
26	01/8	高エネルギー加速器研究機構	榎本　收志
27	02/8	京都大学エネルギー理工学研究所・京都大学化学研究所	山崎　鉄夫
28	03/7	日本原子力研究所・東京大学大学院工学系研究科付属原子力工学研究施設	横溝英明

第N回加速器科学研究発表会（隔年で開催）

N	年月	開催機関	代表世話人
7	89/12	大阪大学核物理研究センター	近藤　道也
8	91/11	理化学研究所	上坪　宏道
9	93/8	高エネルギー加速器研究機構	木村　嘉孝
10	95/10	日本原子力研究所	鈴木　康夫
11	97/10	SPring－8	宮原　義一
12	99/10	理化学研究所	矢野　安重
13	01/10	大阪大学核物理研究センター	佐藤　健次
14	03/11	高エネルギー加速器研究機構	神谷　幸秀（実行委員長）

2004年4月　　日本加速器学会設立

第N回日本加速器学会・第M回リニアック技術研究会（2004年以降毎年開催）

N/M	年月	開催機関	組織委員長	年会名称
1/29	04/8	日本大学　理工学部	佐藤　　勇	第1回日本加速器学会・第29回リニアック技術研究会
2/30	05/7	九州シンクロトロン光研究センター	富増多喜夫	第2回日本加速器学会・第30回リニアック技術研究会
3/31	06/8	東北大学サイクロトロンRIセンター・東北大学原子核理学研究施設・東北大学大学院工学研究科量子エネルギー工学専攻	石井慶造	第3回日本加速器学会・第31回リニアック技術研究会
4/32	07/8	理研仁科センター	矢野　安重	第4回日本加速器学会・第32回リニアック技術研究会（予定）

本表を作成するにあたり日本大学の田中俊成先生，KEKの武藤建一先生のご協力をいただきました．

第 2 表　学会年会名称についてアンケート結果

回　　答	数
次回年会より,「第 N 回日本加速器学会年会」にする。	142
当面「第 N 回日本加速器学会年会・第 M 回リニアック技術研究会」で従来と同じように行うが，2～5 年後に「第 N 回日本加速器学会年会」の記述に変更する。	5
「第 N 回日本加速器学会年会・第 M 回リニアック技術研究会」の併記記述で今後も開催する。	9
無回答	2

効回答総数 158

写真 5　企業展示の様子

写真 6　懇親会の様子

更が必要であるとの意見が大勢でした．第一回サーキュラー等にて，本学会では加速器の性質上技術的な事柄も多いに議論する場であることを明記する．（学会参加では技術職の方に旅費が出ない機関があるとの報告がありました）技術的な議論の可能なセッション又はシンポジウムを設ける．それにつれて，第 M 回リニアック技術研究会の，第 M 回をやめる．リニアックという言葉をはずす．技術研究会または技術シンポジウムのようなのもを併設する（これらは決議ではない）方向で今後議論を重ねて行くとの方針となり次回組織委員会にその動向が託されることになりました．

会期中，施設見学と懇親会をセットで 2 日目にスケジュールしたのも今回のプログラムの特徴です．懇親会会場が理化学研究所のカフェテリアを利用できることから同じ日にシリーズにすることで移動時間の節約を図ってひとつにまとめました．年会会場サンアゼリアと理化学研究所間の移動時間は徒歩で 15 分程度ですが，さらに移動時間を短くするため 2 台のバスでピストン方式により参加者を輸送しました．

施設見学は，完成したばかりの RI ビームファクトリーの加速器群すべてお見せする方針をとりました．重イオン源，入射器リニアック，理研リングサイクロトロン，中間段リングサイクロトロン，超伝導リングサイクロトロンの豪華コースとなりました．260 名ほどの方が参加しましたが，ルートの関係から 20 名程度のツアーを組むのが精一杯で説明員の不足が否めませんでした．階段の登り降りの多いコースで，全加速器を限られた時間で走破するには，かなりの健脚者である必要がありました．さぞこの後の懇親会のビールがおいしかったこととおもわれました．

さてその懇親会ですが，施設見学より徒歩数分のところの第一食堂で行いました．この年会では懇親会費を 3000 円（昨年より 1000 円安い）としたためか総計 300 人ぐらいの参加がありましたがたっぷりの生ビールをはじめとする飲み物を用意しましたが，反面若干食べ物が不足気味でした．特に暴動は起きませんでしたが．

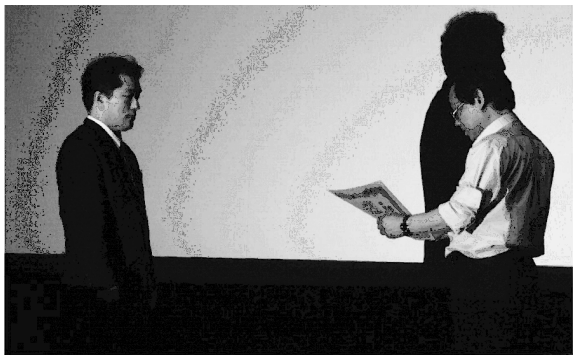
企業展示は，年会の会計を独立採算で行う上で非常に重要な収入源となり今回も精力的に募集をいたしました．先に述べた通り展示会場を確保できなかったために，スペースが中途半端になり大ホールのホワイエにブースを配置して 25 程度の出展を受け付けるつもりで進めたところ，40 近い企業より問い合せがあり，なんとか苦心をして 36 企業の展示を受け入れました．出展に当たり，電力使用とか，ブースの 2 面欲しいとかいろいろご要求があり，必ずしもすべての要求に応じ切れなかった点申し訳なく思っております．

今回の年会にご尽力いただいた，組織委員，プログラム委員および学会幹事会の先生方に，末尾ながら感謝いたします．また会期前後にわたって奔走していただいた実行委員，準実行委員の皆様に感謝いたします．今後の加速器学会年会がより発展をし，充実したものになることを祈念いたしております．次回は広島大学が共催で行うことが決まりました．

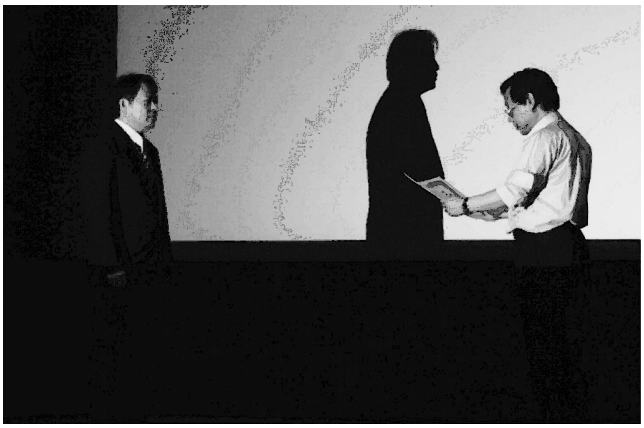
第3回日本加速器学会賞

2007年8月2日に和光市民文化センターで開催された第4回日本加速器学会総会において，第3回日本加速器学会賞授賞式が行われ，奨励賞2名，技術貢献賞3名（受賞理由としては1件であるが，各々の貢献内容の違いにより3名）の受賞者が表彰されました．また，学会3日目には，受賞者による講演が行われました．

奨励賞受賞者



奨励賞：岩田佳之氏（Yoshiyuki IWATA）
【受賞理由】APF方式IH型線型加速器の開発
【略歴】
1972年　東京生まれ
1994年3月　立教大学理学部物理学科卒
1999年3月　立教大学院理学研究科博士課程修了
1999年4月　放射線医学総合研究所 客員研究官
2001年1月　科学技術振興事業団 科学技術特別研究員（放射線医学総合研究所に勤務）
2003年9月　放射線医学総合研究所 研究員
【専門】不安定核の核構造・天体核物理，線形加速器
【連絡先】E-mail：y_iwata@nirs.go.jp



奨励賞：冨澤宏光氏（Hiromitsu TOMIZAWA）
【受賞理由】
フォトカソードRF電子銃の高安定化・高性能化に関わる技術開発
【略歴】
1968年10月　神奈川県生まれ
1996年　3月　東京工業大学理工学部原子核工学科修士課程修了
1996年　6月　ミュンヘン工科大学物理学部博士候補生（ドイツ学術振興会（DAAD）国費留学）
2000年　3月　東京工業大学理工学部原子核工学科博士課程修了
2000年　3月　ロシア・モスクワ光学研究所（IOFAN）短期外来研究員
2000年　4月　㈶高輝度光科学研究センター（SPring-8）加速器部門（現職：副主幹研究員）
【専門】高平均出力・核励起レーザ（粒子線励起レーザ），プラズマ・ガスキネティックス（主にクエンチング機構の理論的解明と実証：AMPL '99で受賞），フェムト秒レーザ，表面科学，フォトカソード電子銃，電子線形加速器（主に電子ビームモニター）
【連絡先】E-mail：hiro@spring8.or.jp

技術貢献賞：荻津　透氏（Toru OGITSU）
【受賞理由】
単層超伝導コイルによる複合磁場磁石の開発「発案と概念設計」
【略歴】
1962 年　千葉県生まれ
1986 年 3 月　筑波大学修士課程理工学研究科修了
1986 年 4 月　文部省 高エネルギー物理学研究所 加速器研究系所属（助手）
現在　大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構
大強度陽子加速器計画推進部所属（准教授）
【専門】応用超伝導
【連絡先】E-mail：toru.ogitsu@kek.jp

技術貢献賞：中本建志氏（Tatsushi NAKAMOTO）
【受賞理由】
単層超伝導コイルによる複合磁場磁石の開発「技術設計と磁石開発推進」
【略歴】
1968 年　広島県生まれ
1991 年　九州大学工学部応用原子核工学科卒
1996 年　九州大学大学院工学研究科博士課程修了
高エネルギー物理学研究所 低温センター
（現高エネルギー加速器研究機構 超伝導低温工学センター）助手
2006 年　同　研究機関講師
【専門】超伝導磁石
【連絡先】E-mail：tatsushi.nakamoto@kek.jp

技術貢献賞：東　憲男氏（Norio HIGASHI）
【受賞理由】
単層超伝導コイルによる複合磁場磁石の開発「製作技術の確立」
【略歴】
1963 年　熊本県生まれ
1982 年 3 月　熊本県立球磨工業高等学校 機械科卒
1982 年 4 月　文部省　高エネルギー物理学研究所 工作センター所属（技官）
現在　大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構
機械工学センター所属（技師）
【専門】機械設計・製作
【連絡先】E-mail：norioh@post.kek.jp